

品川区いじめ対策委員会（第1回）

議事録要旨

1 日時

令和2年8月26日（水）午前9時30分から午前11時30分まで

2 会場

教育文化会館 第2講習室

3 審議

- (1) 令和元年度の報告（目安箱・アイシグナル・専用電話）
- (2) 令和2年度「いじめ防止対策の取組」
- (3) 令和元年度のいじめ状況について
- (4) 協議

4 出席者

斎藤尚也委員長、池田幹雄委員、岡本淳子委員

5 発言要旨

(1) 令和元年度の報告（目安箱・アイシグナル・専用電話）

- 目安箱については、平成30年度同様、6月が最も投函件数が多かった。投函者は、中学生よりも小学生の方が多い。その内、投函者が対応を要望した相手はSC、HEARTSが多かった。
- 専用電話については、2学期の5～8年生の相談件数が多かった。
- 相談数の統計、内容について学校の教員にフィードバックすることで、児童・生徒指導の在り方や支援体制の改善に反映するべき。フィードバックするシステムの構築を行う。
- なぜ直接教員に相談できず目安箱への投函になったのかを検討することで、学校全体として相談しやすい雰囲気のある環境づくりに生かすべき。

(2) 令和2年度「いじめ防止対策の取組」

- 品川区のいじめに対する支援体制、防止のための学校での事業についての説明。
- hyper-QUの結果だけでなく、個人面談で聞ける本人の話ともすり合わせを行うことで、両面から本人を理解できるよう検討する必要がある。
- いじめは学級風土に大きく影響される。学級風土調査の結果を各学校の教員がどのように生かしたのか等活用例をまとめ、教員にフィードバックする。他校の活用例

を参考に生かすことができる。

(3) 令和元年度のいじめ状況について

- 認知件数が増加している理由として、いじめの定義の変更により些細ないじめも見逃されなくなったことが考えられる。
- 小学生はいじめの認知件数が大幅に増加している。一方中学生は横ばいとなっている。

(4) 協議 「コロナ禍における差別や偏見によるいじめを防止するための取組について」

○ 現状

- ・全国では、部活クラスターのあった学校への中傷が起きている。感染したら子どもの3割が「感染を秘密にしたい」と答えた。
- ・品川区ではコロナの影響が関係すると考えられるSCへの相談件数が増えている。コロナによる学業、部活への影響についての相談の電話が入っている。
- ・現在学校では、講話の充実や市民科の授業の活用によりコロナ感染防止、コロナ関連のいじめ防止のための取組を行っている。

○今後に向けて

- ・子どもに伝わる伝え方をしなければならない。赤十字社や国立研究所等の専門家を招いて子どもが納得できる形で伝える。伝える方法としてはYouTubeを使用し全校に配信する。誰がかかってもおかしくない、人権を守るべきという内容の「人権」に特化したものを配信すべき。
- ・対策は急ぐ必要があり、地道に取り組んでいくべきである。
- ・子どもが抱える不安などの全体傾向をつかむために、「コロナのことで心配なことはあるか」など校内アンケートをとる。記述式により内容までとらえるてはどうか。傾向を掴んだ上で、養護教諭やSCが心理教育を行う。異常時に表れやすい心理的・身体的反応があることを伝えたり、守られる枠組みの中で子ども同士が自分の気持ちを話し合える時間を作ったりする。またロールプレイを行ったり、対処方法を伝えたりすることも必要である。
- ・感染することは悪くないことを伝える。言われたらどう思うかなど相手の気持ちを考え実感できるような内容を授業で扱う必要がある。子どもの葛藤、イライラが爆発しないように対応すべき。